

公益社団法人日本クラフトデザイン協会

事業評価委員会 議事録

(競輪公益資金による補助事業・平成26年度 親と子のふれあい交流活動 補助事業)

日 時：平成27年3月15日(日) 15:00～16:00

※第2回定例理事会の議題として審議された

場 所：日本クラフトデザイン協会事務局 (東京都渋谷区代々木 1-37-20)

出席者：(理事長) 岡本昌子

(副理事長) 相川繁隆 水野誠子

(理事) 磯谷晴弘 菅野靖 関根正文

西川雅典 林範親 采翠真澄

(監事) 堀内雅博

●実施内容について

- ・担当理事から事業について報告がなされた。

今年度は「環境」をテーマとし、夏期はリサイクルガラスを、冬期は身近な小枝のワークショップを実施した。

■夏期：「スタンドガラスのペンダント」

実施日：平成26年8月27日(水)

会 場：新丸ビル10F「エコツェリア」

参加人数：午前の部 14組 午後の部 13組 延べ57名

■冬期：「小枝のモビール」

実施日：平成27年1月11日(日)

会 場：インターナショナル・デザイン・リエゾンセンター

ミッドタウン・タワー5F

参加人数：午前の部 8組 午後の部 5組 延べ32名

■第54回日本クラフト展に於ける広報展示

平成27年1月10日(土)～18日(日)

会 場：東京ミッドタウン・デザインハブ 第54回日本クラフト展会場

- ・夏期、冬期のワークショップ共に参加者に配布するためのテキストの作成を行った。内容は扱う素材の歴史や技法等図版を交えて作成した。テキストは参加者以外にも関係機関などに送付した。事業実施後も親子の話題を継続させるツールとして、また扱った素材への関心を深めていただく意味で有効であった。
- ・特に冬期のワークショップでは参加者が目標の人数に達しなかった。原因の検証が必要と思われる。

以下、各項目の担当理事からの報告と評価委員の意見等

#### ●事業実施の準備体制について

- ・実行の準備と実施については会員による実行委員会を組織し行った
- ・委員会は計 5 回開催し、テーマの設定からプログラム内容、講師の選定、具体的準備まで詳細を詰めることができた
- ・委員をはじめとする会員の積極的な協力を得られた。個々のプログラムの具体的な準備は適格に進められたと思うが、広報や企画の方法について更に検討する必要がある。委員会だけでなく、他の皆さんの意見も是非提供いただきたい。

#### ●告知・募集の方法について

- ・夏期はエコキッズのプログラムとして開催した。内容が伝わりやすく、対象者への関心の高い内容であったためか、募集開始後 1 週間で定員が埋まった。リサイクルガラスというエコを扱った社会性が参加親子の関心を深めた可能性は高い。
- ・参加費を徴収することを理由に教育関係機関の協力を得にくい状況が続いている
- ・冬期実施の際の広報は考えられる事は行った。しかしながら目標値を達成できなかった事、その反面、実際に参加した方の満足度は非常に高い。  
～事業内容の魅力が適格に伝わっていない。表現出来ていない可能性がある。また、冬期はお正月明け 3 連休のうちの 1 日で、既に学校や町会等の予定が入っている方も多かったようである。次回は日程の設定をより慎重に行った方が良い。
- ・広報の媒体について、今年度フェイスブック等も導入して行った。協会のページファンの広がりが増え、広報効果の決め手となる。そうした工夫も必要である。しかしながら、アンケートを見る限りでは印刷媒体の力は以前強く、両方のよさを引き出すことが肝要と考える。

### ●実施内容について

- ・夏冬、共通テーマの元、素材をかえて実施した。どちらも参加者の満足度は高く、適切な設定であったと考える
- ・全体の時間配分は概ね良かった。指導補助として関わってくれた委員やアルバイトの方の協力体制のおかげであった。
- ・事業の形態は、事業開始いらい同じようなスタイルを踏襲している。数年間実施してきた結果をもう一度検証してみる時期ではないのか

### ●今後の展開について

- ・今後も素材を変えてクラフトの素材や手法の魅力を発信していく。
- ・今年度は小学生低学年を対象にしたサマースクールのプログラム実施の依頼を受け実施した。素材を直に触れ感じてもらえる内容であった。また、次年度は江別市で親子ワークショップと企画展示を組み合わせた事業を実施する。これまでの実績が少しずつ評価を受けて具体的な形で広がり始めている。

### ●目的の達成について

- ・特に冬期実施の参加人数は目標を下回った。事前広報の方法と発信先を再検討する。
- ・今年度も参加者の満足度は高く、本事業を通じてクラフトに親しみ、またそれをきっかけに親子の対話を深めていく目的は達成されたものとする。
- ・広報展示を 8564 人が訪れた第 54 回日本クラフト展会場に展示した。多くの方々にこの事業の意義を伝えることが出来た。冬期のワークショップは日本クラフト展会場からガラス越しに見えるロケーションで、和気に満ちた様子をたくさんの方々に感じていただけたものとする。
- ・参加者の満足度が非常に高い事業である。この魅力を事前広報や事後の報告等で更に有効な方法で伝えていく必要がある。

以上